

## 中学生の自己愛傾向と援助要請, 問題行動, 学業成績との関連

# The Effects of Narcissism on Help Seeking, Problematic Behavior, and Academic Achievement in Junior High School

阿部晋吾<sup>1</sup>・太田仁<sup>1</sup>・福井斉<sup>1</sup>・渡邊力生<sup>1</sup>

ABE Shingo, OTA Jin, FUKUI Hitoshi, WATANABE Rikio

This study was designed to examine the effects of narcissism on help seeking, problematic behavior, and academic achievement in junior high school. Five hundred and forty-one Japanese junior high school students (274 male, 277 female) completed a questionnaire survey. Survey items were Narcissistic Personality Inventory-Short Version (NPI-S), the frequency of asking questions of teacher, the frequency of being reprimanded from teacher, and the results of the latest regular examination. Using structural equation modeling, the results showed that the higher the NPI-S is, the more often students asked to teacher, were reprimanded from teacher, and got good grade. In addition, it was also found that the three subscales of NPI-S have different effects on these behaviors. From the results, it was suggested that narcissism influences various aspects in school life.

**Key words:** narcissism, help seeking, reprimand, academic achievement

自己愛傾向は、自己中心的、自己肥大的、支配的、他者操作的な特徴を持つ性格特性である(Emmons, 1987; Paulhus & Williams, 2002)。自己愛傾向に関する研究では、これまでに恋愛 (Campbell, Foster, & Finkel, 2002), 怒りや攻撃行動(阿部・高木, 2006; Bushman & Baumeister, 1998), 援助行動(阿部・高木, 2011) など、さまざまな対人行動との関連が検討されてきている。しかしながら、自己愛傾向に関する研究は大学生以上を対象としたものが中心であり、高校生以下の自己愛傾向を扱った研究は散見されるものの(例えば, Ha, Peterson, & Sharp, 2008; 日比野・湯川・小玉・吉田, 2005), いまだに数少ないのが現状である。思春期・青年期の児童生徒の自己愛傾向と日常の対人行動との関連について検討することは、生徒指導やキャリア教育においても有用である。

そこで本研究では、中学生の自己愛傾向が学校生活での諸側面に及ぼす影響について、教師への質問頻度、教師から叱られる頻度、そして学業成績に着目して検討する。

教師への質問は、生徒の教師への援助要請としてとらえることができる。援助要請には、肯定的援助と否定的援助要請に大別することができる。前者は、援助要請で得られた援助により自律や適応が促進される道具的援助要請(*instrumental help-seeking*), 自律的援助要請(*autonomous help-seeking*), 適応的援助要請(*adaptive help-seeking*)と呼ばれる向社会的な援助要請(*appropriate help-seeking*)がある。それに対して後者は、援助による問題解決を意図せず他者との関係に依存して、個人の解決努力がほとんどなされないまま過剰に援助を求める依存的援助要請(*dependent help-seeking*)がある(Butler, 1998; Ryan, Patrick, & Shim, 2005)。また、道具的援助要請は、a)問題を独力で解決しようと試み、b)答えではなく解決方法のヒントを要請し、c)その後の問題を独力で解決する力を向上させることに繋がる行動と定義されており(Butler, 1998), 一方で依存的援助要請は、援助の必要がないときに他者に援助を求めることとされている。

---

<sup>1</sup> 梅花女子大学心理こども学部心理学科

る(Newman, 2008; Ryan, et al., 2005)。

以上の定義から, 教室において生徒個人で課題を解決することが困難な場合に教師に質問する頻度(以降, 質問頻度)は, 自律指向性の強さである向社会的態度を有している指標として位置づけることができる。援助要請の研究においては, 自尊感情が低いほど, 自力で課題を解決できないといった自身を傷つける情報に対して過敏に反応するため, 援助要請を抑制するという脆弱性仮説(Tessler & Schwartz, 1972)が知られている。自尊感情と自己愛傾向は一部重複した概念であることから, 自己愛傾向が高いほど, 質問頻度は高いことが予測される。

次に, 教師から叱られる頻度(以降, 叱られ頻度)であるが, Ha et al. (2008)によれば, 児童の自己愛傾向は問題行動の頻度と正の相関を示すことが明らかとなっている。問題行動の頻度は, 叱られる機会の多さとも関連していると考えられることから, 自己愛傾向が高いほど, 叱られ頻度は高いことが予測される。

最後に, 学業成績との関連について検討する。Baumeister, Campbell, Krueger, and Vohs (2003)は過去の研究を幅広くレビューし, 全般的な傾向として, 学業成績は自尊感情と正の相関がみられると述べている。したがって, ここでも自尊感情と自己愛傾向の概念上の重複をふまえて, 自己愛傾向が高いほど, 学業成績は高いことが予測される。

以上のことから, 自己愛傾向は, 質問頻度, 叱られ頻度, 学業成績のいずれとも正の関連がみられることが予測される。その一方で, 自己愛傾向にはさまざまな側面が存在することが知られており, それぞれが異なる影響力を持つ可能性も考えられる。例えば小塩(1998)によれば, 自己愛傾向には優越感・有能感, 注目・賞賛欲求, 自己主張性の3つの側面があることがわかっており, 本研究ではこれら独自の影響についてもあわせて検討する。

## 方 法

### 調査対象者および調査方法

2010年12月に, 三重県中央部の公立中学校1年生から3年生を対象に調査を実施し, 541名(男子264名, 女子277名)から回答を得た。なお, 本研究は阿部・太田(2012, 2014), 阿部・太田・福井・渡邊(2016)と同じ調査から得られたデータの一部を使用している。

### 質問項目

自己愛傾向: 小塩(1998)の自己愛人格目録短縮版の一部を抜粋して使用した。この尺度は“優越感・有能感”“注目・賞賛欲求”“自己主張性”の三つの下位尺度からなる。本研究では, 各下位尺度10項目の中から, 小塩(2004)において因子負荷量の高かった上位3項目ずつを選定し, 計9項目を使用した。選択肢は“1.あてはまらない”から“5.あてはまる”までの5件法である。なお, “私は, 周りの人たちより有能な人間であると思う”については, 調査実施先の教員より, 中学生には表現が分かりにくいとの指摘を事前に受けたため, “私は, 周りの人たちよりできることが多い人間であると思う”に修正した。使用した項目を Table 1 に示す。

Table 1 自己愛傾向の項目内容

優越感・有能感：
私は、周りの人達より、優れた才能を持っていると思う
私は、才能に恵まれた人間であると思う
私は、周りの人たちよりできることが多い人間であると思う
注目・賞賛欲求：
私は、みんなの人気者になりたいと思っている
私は、どちらかといえば注目される人間になりたい
私は、人々の話題になるような人間になりたい
自己主張性：
私は、自己主張が強いほうだと思う
私は、自分の意見をはっきり言う人間だと思う
私は、ひかえめな人間とは正反対の人間だと思う

質問頻度：定期試験前の1週間で、先生に質問や相談したことがどの程度あったか尋ねた。選択肢は“1. 全くなかった”“2. 週に1~2回”“3. 週に3~6回”“4. 7回以上”の4件法であった。

叱られ頻度：今の学年の4月から今までに、先生から叱られたことがどの程度あったかを尋ねた。選択肢は“1. 全くなかった”“2. 1~2回”“3. 3~6回”“4. 7回以上”の4件法であった。

学業成績：前回の定期試験で、60点以上だった科目の数を尋ねた。選択肢は“1. 0科目”“2. 1科目”“3. 2科目”“4. 3科目”“5. 4科目”“6. 5科目以上”の6件法であった。

## 結 果

### 尺度の信頼性および記述統計

自己愛傾向の各下位尺度の $\alpha$ 係数は、優越感・有能感が $\alpha = .84$ 、注目賞賛欲求が $\alpha = .86$ 、自己主張性が $\alpha = .77$ であり、いずれも高い内的整合性が確認されたので、それぞれ3項目の得点を合計したものを尺度得点とした。ただし、後述する構造方程式モデリングの際には、尺度得点はいずれに、潜在変数によって各因子を表現した。自己愛傾向の各下位尺度得点、および質問頻度、叱られ頻度、学業成績の平均値と標準偏差、そして相関係数をTable 2に示す。

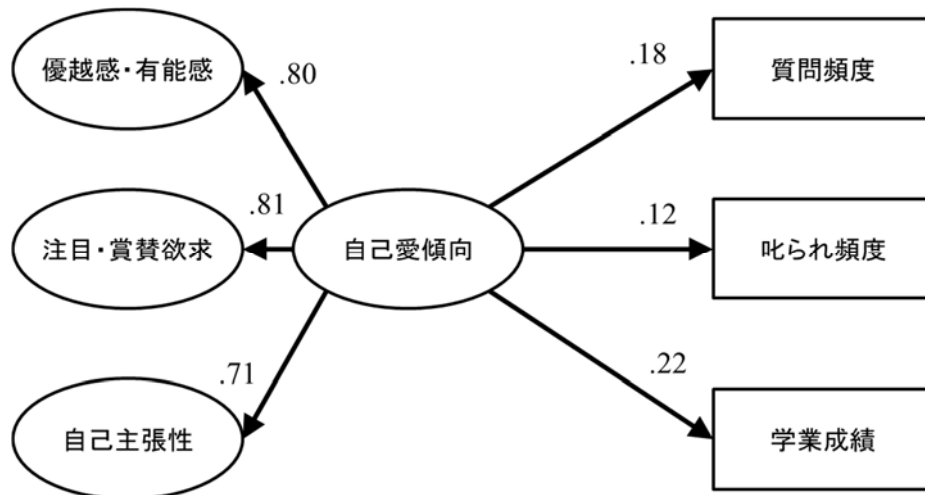
Table 2 各下位尺度・項目の平均値と標準偏差、相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	1	2	3	4	5
1. 優越感・有能感	7.35	3.11					
2. 注目・賞賛欲求	7.91	3.20	.56***				
3. 自己主張性	8.59	2.97	.45***	.47***			
4. 質問頻度	2.02	0.95	.12**	.15***	.09*		
5. 叱られ頻度	2.46	1.00	.03	.11*	.14**	.15***	
6. 学業成績	3.72	1.75	.19***	.13**	.16***	.17***	-.12**

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

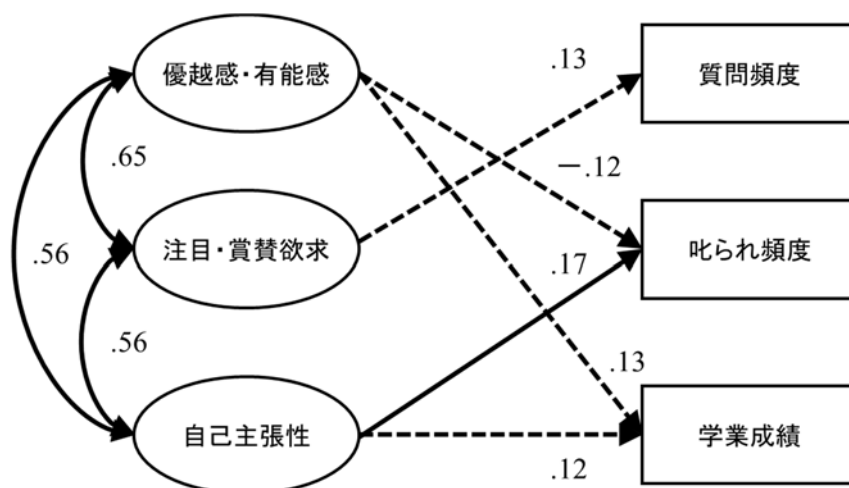
モデルの検証

自己愛傾向と質問頻度, 叱られ頻度, 学業成績との間にどのような関連がみられるか, 構造方程式モデリングを用いて分析した。まず, 自己愛傾向の各下位因子に属する項目によって潜在変数を構成し, さらにその上位因子として, 総合的な自己愛傾向を設定した二次因子モデルを作成し, その影響について検討した(Figure 1)。このモデルの適合度は高く (CFI = .97, RMSEA = .05), データに対するモデルのあてはまりは良好といえる。総合的な自己愛傾向は, 質問頻度, 叱られ頻度, 学業成績のいずれに対しても有意な正の関連がみられた。



自己愛傾向の各下位尺度の観測変数, および誤差項はすべて省略  
 数値は標準化係数, パスはいずれも  $p < .05$

Figure 1 二次因子モデルによる自己愛傾向と質問頻度, 叱られ頻度, 学業成績との関連



自己愛傾向の各下位尺度の観測変数, および誤差項はすべて省略  
 数値は標準化係数, 実線のパス  $p < .05$ , 点線のパス  $p < .10$

Figure 2 自己愛傾向の下位因子と質問頻度, 叱られ頻度, 学業成績との関連

次に、各下位因子の独自の影響についても検討した。ここでは上位因子を設定せず、各下位因子から直接、質問頻度、叱られ頻度、学業成績すべてに対してパスを設定した。その後、有意でないパスについては削除したところ、最終的に Figure 2 のモデルが得られ、こちらも十分に高い適合度が確認された (CFI = .98, RMSEA = .05)。優越感・有能感は叱られ頻度との負の関連が有意傾向でみられた一方で、自己主張性は叱られ頻度と有意な正の関連がみられた。また、優越感・有能感と自己主張性はいずれも学業成績との正の関連が有意傾向でみられた。さらに、注目・賞賛欲求は質問頻度との正の関連が有意傾向でみられた。

## 考 察

本研究の目的は、中学生の自己愛傾向が、教師への質問頻度、教師から叱られる頻度、学業成績とどのように関連しているかを検討することであった。まず、Figure 1 の結果より、自己愛傾向が全般的に高いほど、教師に質問しやすいと同時に叱られることも多く、また学業成績もよい、ということが明らかとなった。これらは従来の知見とも整合しており、予測どおりの結果が得られた。

それと同時に、自己愛傾向の下位尺度である 3 つの因子が、これらの行動に対して独自の影響力を持つことも示された。Table 1 および Figure 2 でも示されているとおり、自己愛傾向の下位因子間には中程度以上の正の相関がみられる。それにもかかわらず、構造方程式モデリングによる相対的な影響関係においては、正反対の関連性を示す因子が存在することは、自己愛傾向の多面性をよく表しているといえよう。

まず、自己主張性が高いほど、また、優越感・有能感が低いほど、叱られ頻度が高いことが明らかとなった。自己主張性が高い生徒は教室で目立ちやすく、気づかれやすいため、叱られる対象となりやすいのかもしれない。一方で、優越感・有能感が高い生徒が、本人の自己評価のとおり優良な生徒であるとすれば、叱られる機会は実際に少ないことは理解できる。あるいは、周囲からの評価を全く気にしないがゆえに優越感・有能感が高いような場合には、実際には叱られているにも関わらず、本人は叱られているとは認識していないこともありうるだろう。

次に、優越感・有能感と自己主張性が高いほど、学業成績が高いことが明らかとなった。これらの因子はいずれも自己効力感と関連があると考えられ、自分の能力に対する自信が勉学意欲にもつながり、それが高い学業成績に結びついている可能性が考えられる。

さらに、注目・賞賛欲求が高いほど、質問頻度が高いことが明らかとなった。これは、注目・賞賛欲求が高い生徒にとっては、質問することは注目を得るための手段になりうることを示唆している。あるいは、良い成績を取って高い評価を受けたいという意識の強さが、何度も質問に行くという行動に結びつくのかもしれない。

本研究の結果は、思春期における自己愛者の行動傾向を新たに解明したといえよう。ただしその一方で、いくつかの課題も残されている。まず、本研究の結果は自己報告にもとづいており、それぞれの行動はいずれも単一項目で回答を求めたため、正確に測定されているとはいいがたい。特に、学業成績については学校現場で行われた調査上の配慮から、“定期試験で 60 点以上だった科目数”という婉曲的な質問方法しか採用できなかった。自己愛傾向の下位尺度からの影響が有意傾向にとどまるものが多かったのは、こうした測定上の問題が結果に影響している可能性もある。今後の研究では、たとえば友人・親・

教師からの他者評価を取りいれたり, 行動観察を行ったりすることによって, より客観性の高いデータを取得すべきであろう。さらに, その客観的なデータと自己評価とのずれを分析対象とすることも, 自己愛傾向の研究においては重要であると思われる。

また, 自己愛傾向が各行動の原因であるのか結果であるのか, すなわち因果関係については, 本研究は一時点での調査であるため明確にすることができない。これは Twenge and Campbell (2009)が指摘しているとおり, 正の関係がみられるからといって, 自尊感情や自己愛傾向を高めることが学業成績を向上させるわけではなく, 学業成績の高さが, 結果として自尊感情や自己愛傾向の向上につながっている可能性も考えられる。質問頻度, 叱られ頻度についても同様のことがいえ, この因果関係の特定は実践的介入を行う上できわめて重要であることから, 縦断的な研究を実施することで慎重に検討していく必要がある。

さらに, 本研究では自己愛傾向と各行動との直線的な関係性を想定しているが, 曲線的な関係についても考慮しておくべきであろう。すなわち, 自己愛傾向は高すぎても低すぎても望ましくない結果をもたらす可能性があり, 逆U字曲線を描くような, 適度な水準が存在するのかもしれない。

これらの点を踏まえた上で, 本研究で示されたような自己愛傾向の諸側面の詳細な影響が解明されていけば, 学校現場での指導においても, より有用な指針を示すことができるだろう。

## 引用文献

阿部晋吾・太田仁 (2012). 中学校における教師からの叱られ経験の実態 梅花女子大学心理こども学部紀要, **2**, 75-81.

(Abe, S. & Ota, J. (2012). Students' experiences of being reprimanded in junior high school. *Baika Women's University Research Bulletin - Faculty of Psychology and Children's Studies*, **2**, 75-81.)

阿部晋吾・太田仁 (2014). 中学生の叱られ経験後の援助要請態度: 自己愛傾向による差異 教育心理学研究, 教育心理学研究, **62**, 294-304.

(Abe, S. & Ota, J. (2014). Junior high school students' attitudes toward help seeking after being reprimanded: Differences between students' high and low in narcissism. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **62**, 294-304.)

阿部晋吾・太田仁・福井斉・渡邊力生 (2016). 教師からの叱りに対する生徒の反応とビッグファイブ性格特性との関連 梅花女子大学心理こども学部紀要, **6**, 17-22.

(Abe, S., Ota, J., Fukui, H., & Watanabe, R. (2016). The Relationships between Students' Responses to Being Reprimanded by Teacher and the Big Five Personality Traits. *Baika Women's University Research Bulletin - Faculty of Psychology and Children's Studies*, **6**, 17-22.)

阿部晋吾・高木修 (2006). 自己愛傾向が怒り表出の正当性評価に及ぼす影響 心理学研究, **77**, 170-176.

(Abe, S. & Takagi, O. (2006). The influences of narcissism on the justifiability evaluation of anger expression. *Japanese Journal of Psychology*, **77**, 170-176.)

阿部晋吾・高木修 (2011). 自己愛傾向が援助行動に及ぼす影響 関西大学社会学部紀要, **42**, 65-73.

(Abe, S. & Takagi, O. (2011). The influences of narcissism on helping behavior. *Bulletin of the Faculty of Sociology, Kansai University*, **42**, 65-73.)

Baumeister, R. F., Campbell, J. D., Krueger, J. I., & Vohs, K. D. (2003). Does high self-esteem cause better

- performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles?. *Psychological science in the public interest*, **4**, 1-44.
- Bushman, B., & Baumeister, R. (1998). Threatened egotism, narcissism, self-esteem, and direct and displaced aggression: Does self-love or self-hate lead to violence? *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 219–229.
- Butler, R. (1998). Determinants of help seeking: Relations between perceived reasons for classroom help-avoidance and help-seeking behaviors in an experimental context. *Journal of Educational Psychology*, **90**, 630-643.
- Campbell, W. K., Foster, C. A., & Finkel, E. J. (2002). Does self-love lead to love for others? A story of narcissistic game playing. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 340–354.
- Emmons, R. A. (1987). Narcissism theory and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 11–17.
- Ha, C., Peterson, N., & Sharp, C. (2008). Narcissism, self-esteem, and conduct problems; Evidence from a British community sample of 7–11 year olds. *European Child & Adolescent Psychiatry*, **17**, 406-413.
- 日比野桂・湯川進太郎・小玉正博・吉田富二雄 (2005). 中学生における怒り表出行動とその抑制要因：自己愛と規範の観点から 心理学研究, **76**, 417-425.  
(Hibino, K., Yukawa, S., Kodama, M., & Yoshida, F. (2005). Anger expressive behaviors and its inhibitory factors in Japanese junior high school students: From the aspect to narcissism and norms. *Japanese Journal of Psychology*, **76**, 417-425.)
- Nelson-Le Gall, S., Gumerman, R., & Scott-Jones, D. (1983). Instrumental help-seeking and everyday problem-solving: A developmental perspective. In B.M. DePaulo, A. Nadler, & J.D. Fisher (Eds.). *New directions in helping: Help seeking*. Vol. 2. New York: Academic Press. pp. 265-283.
- Newman, R.S. (2008). The motivational role of adaptive help seeking in self-regulated learning. In Schunk, D.H. and Zimmerman, B.J. (Eds.), *Motivation and self-regulated learning: Theory, research, and applications*. New York, NY: Lawrence Erlbaum Associates. pp. 315-337.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-290.  
(Oshio, A. (1998). Relationships among narcissistic personality, self-esteem, and friendship in adolescence. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **46**, 280-290.)
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版  
(Oshio, A.)
- Paulhus, D. L., & Williams, K. M. (2002). The Dark Triad of personality: Narcissism, Machiavellianism and psychopathy. *Journal of Research in Personality*, **36**, 556–563.
- Tessler, R. C. & Schwartz S. H. (1972). Help-seeking, self-esteem, and achievement motivation. An attributional analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **21**, 318-326.
- Twenge, J. M., & Campbell, W. K. 2009. *The narcissism epidemic: Living in the age of entitlement*. New York: Free Press.